

# CAFFFEIN MAX COCA HARD

written by HADEYA remixed by JIM THOMPSON

## 1 2

「人生について話して頂けますか？」

担当医が質問する。下らない糞カウンセリングは続いている。続けられない訳には行かない。措置入院を解除するには良い子を演じる必要があるからだ。この死後世界において。

外堀登紀子———私は良い子を演じた。

「私は良い子でした。賢くて性格の良い、凄〜く良い子」

記憶が蘇る。自分が死んだ時の記憶が。

突入したSWATが叫ぶ。躊躇なく、私はトリガーを引き———

———パン、乾いた銃声がして私は死んだ———顎から脳天をプチ抜き。壁に脳漿を飛散させ、人生を激しくプチ壊し。

「良い子ですか。それは素晴らしい。外堀さんを理解できて嬉しいです」

理解なんか求めちゃいない。最も手前等に私の事が理解できるとも思っていない。私が求めるモノはたった一つ

「これだよ」

言うなり、指先ピストルを向けた。担当医に。撃鉄を起こす。イマジネーションの。私には確かに聴こえる。その効果音が。幻聴の効果音が。

パン！

そのままスライド式のドアを開け、今度は指先でショットガンを築く。患者と呼ばれる〈惰性〉の集団を片っ端から撃ち殺す。

前進しながら私は叫ぶ———クソツタレ共、手前等、皆殺した、と。事実、そうした。この死後世界で。

人間の本质は変わらない。だからこそ私はトリガーを引く。マックス・リスク、マックス・リターンと言う名のトリガーを。

これでも喰らいな、メデたいヤツピー共。

## 1

製鉄所から盗んだ鉄パイプでブラウン管を打った。ミシッと音がして、ブラウン管に亀裂が走った。これでいい。父は大好きなテレビが見られなくなる筈だ。

事の発端は昨晚。父が私が大切にしている〈ジェイソンの仮面〉を捨てた事に起因する。  
脅かすつもりで真っ暗な室内で仮面を装着した。私を見た父は激高し、喚きながら仮面を捨てた。  
許せなかった。私も父の大切なモノを奪おう———そう思い、ブラウン管を破壊した。これでお相子だ。  
テレビを破壊された父は何をしたと思う？ 私を精神病院に監禁したのだ。  
私の心の中で何かが壊れた。壊れたのは〈理性〉と言う名の歯車だった。

1 + 1 = 3

些細な事から人生は壊れる。今、この作品が壊れたように。  
一度、壊れたら治す事は出来ない。以後は火達磨になって、突っ走るしかないのだ。

## 2

最終電車は人も疎ら。私はドアの傍に立ち、携帯端末で音楽を聞いている。金髪ロン毛の男性が自分を見ている事は知っていたが、何故、見ているかまでは想像が尽かなかった。

ロン毛が立ち、私の元へやって来た。私はイヤホンを外した。

「うるせえんだよ、音楽！ 漏れまくってるじゃねえか！」

頭を下げ、私は丁重にお詫びした。低姿勢がロン毛の怒りを煽ったのだろう。ロン毛は厳しく攻め立てた。今度、音楽を聞いているところを見たら殺す、とまで言って来た。私は謝り続けた。悪循環である。

ロン毛は私の胸倉を掴んだ。

「ざけんじゃねえぞ、手前！」

その時だった。私の頭突きがロン毛の鼻を打ったのは。間髪入れず手首を捻り、足首を払う。ロン毛は倒れ、鼻を抑えながら呻いた。

「正当防衛だよ。ほら、そこに証人もいる」

そう言って、私は鉄板の入ったエンジニア・ブーツで男の鳩尾を蹴り上げた。ロン毛はゲロに塗れ、泣いている。私は再びイヤホンを装着した。

\*

ビデオ・レンタル店でのバイト中。彼氏が女性社員と仲睦まじげに喋っているのが気に喰わなかった。私は二人の目の前でビデオが並んだ重機を力任せに倒してやった。

「お前はクビだ！」

店長が怒鳴る。私も怒鳴り返した。

「辞めてやるよ、こんな店！」

エプロンを脱ぎ、そのままバックヤードを後にした。

ドアを開けると、彼氏が行く手を阻んだ。懸命な釈明を試みる。

「落ち着けよ、登紀子。一体——」

顔面に右ストレートを打ち込んだ。邪魔者を排除し、店を出る。出たところで男に声を掛けられた。

「いい右ストレートだったぜ」

サングラスの男が告げた。誰だ、こいつ???

「あんた、誰？」

「平良将司。タイラーって、呼んでくれ」

「私に何の用？」

「男が女に声を掛けるって言ったら、する事は一つしかないだろう？」

### 3

事を終え、タイラーはタバコを一服している。私もタバコに火を点けた。

「最高だったぜ」

白煙を吐き、私はプロポーズした。

「結婚する、私と？」

「出会って数時間で結婚か。それも人生かもな」

「答えは？」

タイラーは迷わず、答えた。

「イエスだ。結婚しよう」

### 4

炎天下の赤坂を私は歩いている。汗ダクになりながら。

「この声が聴こえるか？」

脳内で声がした。幻聴かも知れない。宇宙人かも知れない。どうでも良い。

独り言で私は答えた。

「……誰？」

「ミスターエックスと名乗ろう。それにしても暑いな？」

「暑くて気が変になりそう」

「脱げば、涼しくなるぜ」

私はTシャツを脱いだ。デニムも脱ぎ、下着も脱いだ。スマートフォンを捨て、腕時計を捨てた。財布もクレジットカードも何もかも捨てた。

私は人生を捨てたのだ。第二の人生を歩む為。

全裸で街を歩いた。警官の話では二キロも歩いたそうだ。

住宅街へ出たところでパトカーが駆け付けた。警官が私を取り囲み、公然わいせつ罪で逮捕された。

東京地検の命令で精神鑑定を受け、完全なる反社会性人格のお墨付きを貰った。そして措置入院となり、脳に電気ショックを1ダース、喰らい——

「——今に至る訳。私が思うに……」

ベッドの上で呟いた。隣のベッドで寝ている患者は興味津々と言った様子で話を聞いている。

「ハチャメチャな方が人生は楽しいんじゃない？」

「……かも知れない」

「かも知れないじゃなくて、絶対にそう。サラリーマンみたいな安全な生き方をして何が楽しいの？」

「でも——」

「真理よ。私、知ってるの。何もかも。ニーチェでも読みなさい。永劫回帰思想って、奴。あれ、真理よ。私、知ってるの。だって私、死後世界から来たから」

## 5

タイラーが愛車を走らせる。ウインカーを切りながらタイラーは言った。

「仕事の話があるんだけどよ」

「乗った。内容は？」

「アメリカに住む知人が獣の頭部を欲しがっている」

「獣？」

「ジャージーデビル。ニュージャージー州に生息するとされる獣だ。密猟者の話では〈タマニーマウンテン〉に生息してるみたいなんだ」

「報酬は？」

「クライアントは一つの頭部を一億で買うと申し出ている」

カーラジオの選曲が変わった。ハードロックからグランジへ。私はヴォリュームを上げた。

タイラーは続けた。

「現地の密猟者と話は付いてる。ショットガンでジャージーデビルを仕留めて生首を持ち帰る。簡単なミッションだろう？」

頭の中で反芻する。ジャージーデビルの息の根を止め、生首を奪い、クライアントに売り付ける。報酬は一億。悪い話じゃない。

……最初はそう思っていた。しかし、この山がきっかけで私は〈死後世界〉へ向かう事となる。

人生は簡単だ。路線変更をして、アクセルを踏めば良い。

それはチキンレースだ。勝つか負けるか、二者択一なのだ。

## 6

背後からジャージーデビルに飛び掛かった。獲物が振り向く。その顔は……父だった。

そこで飛び起きた。全身に押し掛かる質量が百トンに感じられる。

「……悪夢を見た」

「正夢かもな」

今、私はクライアントの自家用ジェットに乗っている。

しこたま飲んだし、しこたまキメた。そうやって現地に着くまで時間を潰していた。

四駆のジープで〈タマニーマウンテン〉を目指した。昨晚、銃の扱いは学んだ。準備はバッチリ。バッチリ過ぎるくらいバッチリ。

山を登る。ワークブーツが轍を踏む。

口笛が聞こえた。密猟者が言った事をタイラーが同時通訳する。

「ジャージーデビルの痕跡が見付かったそうだ」

「つまり、この辺にいるって事？」

「だろうな」

「うわあああああっ！」

悲鳴———ショットガンをコッキングした。臨戦態勢で悲鳴の元へ接近する。血塗れの密猟者の側に、そいつはいた。ジャージーデビルは密猟者をかっ喰らって生きているのだ。

その時、背後で物音がした。複数の物音が同時並行で移動する。咄嗟に勘付いた。囲まれている、と。

「始まったぜ」

「ブツ放す！」

さあ、ショーの始まり、だ。いやっほ〜〜〜！！ドラゴン族と言う、マックス・タイプの戦闘民族のボスに。彼は満面の笑みを浮かべている。

「契約成立だな、余計な事は企むなよ」

「あんたも、ね」

立ちながらタバコに火を点けた。ジェットライターが火を噴いた———

## 7

———ショットガンが火を噴いた。

死体の側に接近し、マチェットで生首を落とす。何度も振り翳し、やっとの事で首を落とせた。背後で物音———振り向くと更に背後で物音。完全に囲まれている。絶体絶命……。

## 8

獣に追われ、一か八か崖からジャンプした。木の枝をクッションにして落下して行く。落下先は川。激流だった。溺れながら流されて行く。懸命に岩を掴んだ。

……そこから先は覚えていない。何でも付近にいた二人組みの男性がゴムボートで救助してくれたのだそう。

意識を戻すと、私はICUにいた。ご丁寧に手首に手錠が装着され。私は……溜息を吐いた。

## 9

年貢の納め時。と思うだろう。そう思う時、そうなる事は極めて稀だ。

迎えに来た刑事の胸のホルスターの留め金が外れているのを私は見逃さなかった。

刑事が日本語の通訳を交え、話す。

「あなたには黙秘権があります。ここでの発言は裁判の際、不利な証言として扱われる事があります」

私は黙っていた。刑事が手錠を外す。そして――

私はホルスターに手を伸ばし、瞬時にピストルを奪った。刑事の頭を手繰り寄せ、人差し指で安全装置を解除して銃口を向けながら室内の他の刑事に向け、叫んだ――「ゲット・バック、と。

彼らは動揺していた。撃鉄を起こし、私はもう一度、叫んだ。部屋が壊れるのではないかと思うほど強い声で

――

# FUCKIN' GET BACK!!!!!!

## 10

闇の中、一発の銃声がつんざく。立て続けに二発、三発と銃声。

銃砲店に立て籠った。周囲はパトカーが包囲している。マシンガンを構えた。通訳の警官が拡声器で日本語で訴える――「武器を捨てて大人しく投稿しなさい、と。

その時、背後でドアを破る音がした。SWAT が突入したのだ。

振り返りながら私はマシンガンを乱射した。SWATも銃を乱射する。室内の静寂を銃声引き裂く。私は撃った。派手に撃ちまくった。

これまでもマシンガン撃って来た。今も撃ってるし、この先も撃ち続ける。

ハチの巣になり、仰向けに私は倒れた。

## 11

私は死んだ――派手に。ド派手に。

日曜日の屋下がり。ポカポカ陽気の喉かな日常。時刻はきっかり13時を告げている。

## 日本人女性、白昼の銃砲店で銃撃戦。違法渡航と脱走、魔物の密漁に関与か？

この事件は翌朝のトップ・ニュースになり、紙面を賑わせた。そして私は死後世界の病院で精神鑑定を受ける訳。……私、思うの。人生って、ハチャメチャな方が面白いんじゃないか、って。人に何て言われようとお構いなし。パブリック・イメージなんてクソクラエ。

実像こそ全てよ。そして、あんたらの実像はイメージに負けてる訳。

そう言う奴等に何て言うか分かる？ 簡単簡単——だから、どうした？ っていうだけ。

言って御覧なさい。だから、どうした？ って。

向こうは笑うでしょうよ。そして、貴方は言う訳。

だから、どうしたんだよ、マザーファッカー！！ ってね。

それじゃあ、精神病院に行って来る。死後世界の精神病院に。チャプター1で再会しましょう。

GOOD BYE！！

## **2 SCREAMS - THOMPSON MIX**

written by JIM THOMPSON and HADEYA

### **13**

クラクションを連打する。小林K子の運転する車が疾駆する。街の至る所で〈滑らか系〉が踊っている。人間を片っ端からレイプしている。

「車の運転が可笑しい！」

小林K子は叫んだ。叫んだところで、どうにもならないが。要は作品が……物語が世界の許容値を超えたのだ。

「危ない！」K子が叫ぶ。

「アクセルを踏め！」後部座席のウクレレが苦悶の表情を浮かべながら叫んだ。

公用車は道路を逸脱し、海上へ躍り出た。海の上……道なき道を進んでいる。小林K子は状況を把握できない。

「ど、どうなってるの！」

「せ、世界の許容値を超えたんだ……だから運転が上手く……行かない」

「指示を下さい！」

ウクレレは叫んだ。力を振り絞り。

「アクセルを踏め！ 目一杯、アクセルを踏め！」

小林K子は言われた通りにした。言われた通り、アクセルを目一杯、踏んだ。そして何が起きたと思う？

### **一体、何が起きたと思う？**

公用車は消えた。忽然と消えたのだ。海上から。

辿り着いたのは、未来。ノイズ塗れの楽園。そこで二人は結ばれる。ウクレレ・ジャラーンとデール・フラジャイルは結ばれる。

ハッピーエンドと思うだろう？ ところがどっこい。歓びの歌は絶望シンフォニーに変貌を遂げ、エンディングを迎えるのだ。

\*

熱烈に舌を絡める二人。激しく求め合う二人。

「そこまでよ」

小林K子が言った。手にはピストルが握られている。

パン！ 銃声が鳴り響き、デールを撃つ。額から血を流しながら、デールが倒れる。次は浮気男……ウクレレの番だ。

小林K子は静かにウクレレに銃口を向けた。

「浮気男……この浮気男！」

ウクレレは虫の息。後部座席に仰向けに倒れるウクレレの股間に小林K子は銃口を宛がった。パン！ 銃声と悲鳴、男と女、パニックと決着。しかし小林K子は知らなかった。二人の死体が他の惑星から投影される〈アバター〉である事を。つまりウクレレとデールは今頃、乳繰り合っている事になる。

カーラジオから声がする。ウクレレの声が。

「別れよう、K子。好きな人が出来たんだ」

「知ってる——」

K子は淡々と語った。

「貴方のスーツに発信器を付けておいたから。そのIPアドレスを誰が突き止めると思う？ だ～れが突き止めると思う？ (ニヤリ)」

「な、な……」

「勿論、突き止めるのはエージェント。そしてエージェントは誰にでもなる事が出来る」

「だってよ、こんなに笑える話はないぜ……質屋に行っても、サトウヨカドーに行ってもな」

「誰だ、お前！」

「決まってるだろう。テックスと言う名の……世界終焉、さ」

おぞましい悲鳴が聴こえる。カーラジオから。そして小林K子は知らない。ウクレレこそが滑らか系のキル・スイッチである事を。

ブロックノイズと共に助手席に〈滑らか系〉が現れる。

「言葉を喋れるんだ、俺たちは」

滑らか系が告げた。何を言わんとするかは一目瞭然だ——宇宙征服。未来永劫に渡る、共食いの地獄絵図。絶望による世界支配。

「小林K子、最初の1体をお前が産むんだよ。今、この場で。どうやって産むかは分かるよな？」

小林K子は異変を察知した。自分の顔が崩れる感覚、肉体が変貌を遂げる感覚。ドンドン、自分が滑らか系になって行く確かな感覚……。

小林K子は発狂した。目を見開き、髪を掻き毟り、胴体をクネらせている。

小林K子は悲鳴を上げた。金切り声を。その光景を助手席の滑らか系がじっと見ている。読者である〈あなた〉が見ているように。じっと。

君は分かるか？ その時、小林K子が感じる恐怖を。小林K子が感じる苦痛を。

二つの悲鳴が時空を引き裂いた。真の絶望の世界。その世界で我々が得るモノ、思い知るモノ。それは——

絶望。そして神の裏切り。

## **STYLISH ASIAN STYLE**

written by HADEYA



### **1**

紫カオル。紫が香る。神秘的でいて、どこそれとなくミステリアス。  
しかし彼女は自分の名に反し、ワイルドだ。COOLな、COOLなワイルド・ウーマン。

バトルフィールド・トーキョーに漂う嵐の予感。通勤時の都営新宿線の駅前には人でゴッタ返している。  
しかし私はどこにも属さない。誰とも繋がらない。と言うか、繋がれない。それもその筈——

私はサイバーパンクだから、だ。私こそがサイバーパンクなのだ。つまりワイルド・トーキョー。

バスを降りて歩く。派手なピンクとグレイ色の縦縞でキメたOLが目につく。最新のモード——ここが噂のナイトクラブ・トーキョー。

前方から黄色いシャツの男性。私と二人の視線が交錯する。このスリルが溜まらない……。

解放的になりたくて上を見た。黒い鳥が一直線に飛んでいた。鮮烈な空に、バッドマンのように。  
この街で私は覚醒する。同じ黒い衣服を身に纏う種族として。

我々は散り、それぞれの道を歩む。烈火の如く出会い、イナズマをブツ放し、無言で別れる。  
私はスレ違った男を知っている。今夜の獲物——キリミハデヤだ。派手にKILL ME、派手にKILL YOUって、意味。

彼を射止める為、私は歩く。モーニング・トーキョーを。  
覚醒のサイバーパンク・シティにブルースが聴こえる。アイスをセットし直し、新しいロマンへ没入する。私のハンドルネームはモリイ——

———飛翔開始。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872